豊田講堂と古川図書館

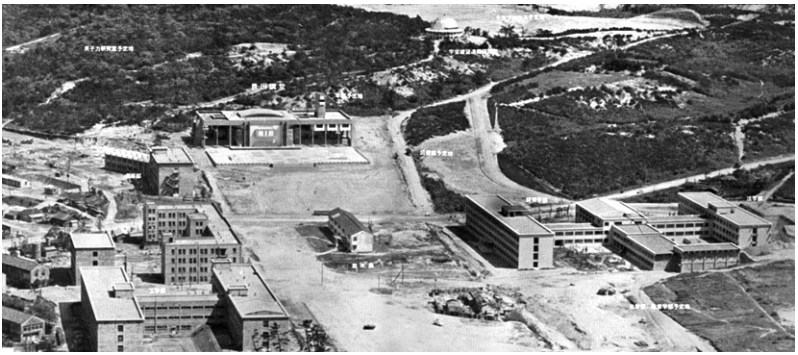
―名古屋大学の寄付建物―

堀田典裕
木方十根

名大史ブックレット
4

豊田講堂

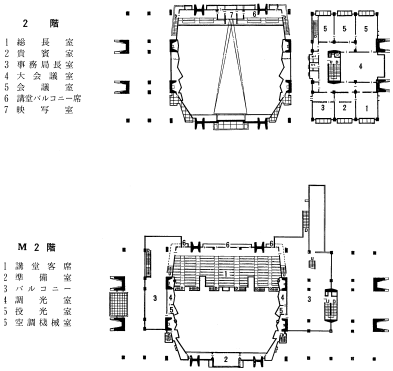
西側ファサード



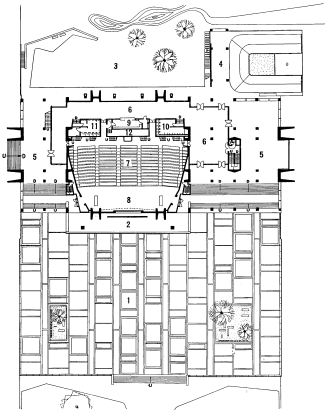
竣工当時航空写真
（『名古屋大学　豊田講堂』）

ピロティよりグリーンベルトを望む

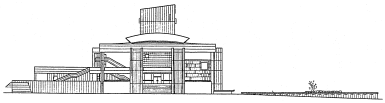
前庭より総長室・会議室を見上げる



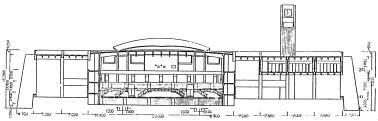
竣工時図面　二、M二階平面図



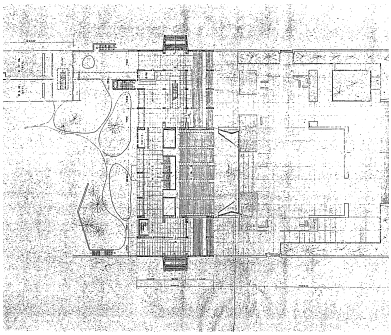
竣工時図面　一階平面図



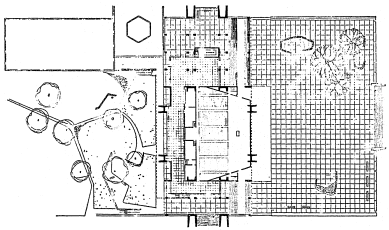
竣工時図面　北側立面図



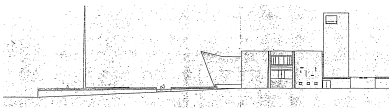
竣工時図面　断面図



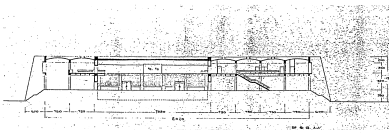
名古屋大学施設部所蔵図面　平面図



『新建築』1959年7月号掲載図面　平面図



名古屋大学施設部所蔵図面　南側立面図



名古屋大学施設部所蔵図面　断面図

古川図書館

古川図書館（現名古屋大学博物館、古川総合研究資料館）、
左：グリーンベルトより、右：豊田講堂より

大閲覧室
（施工当時、『谷口吉郎著作集第 4 巻』より）

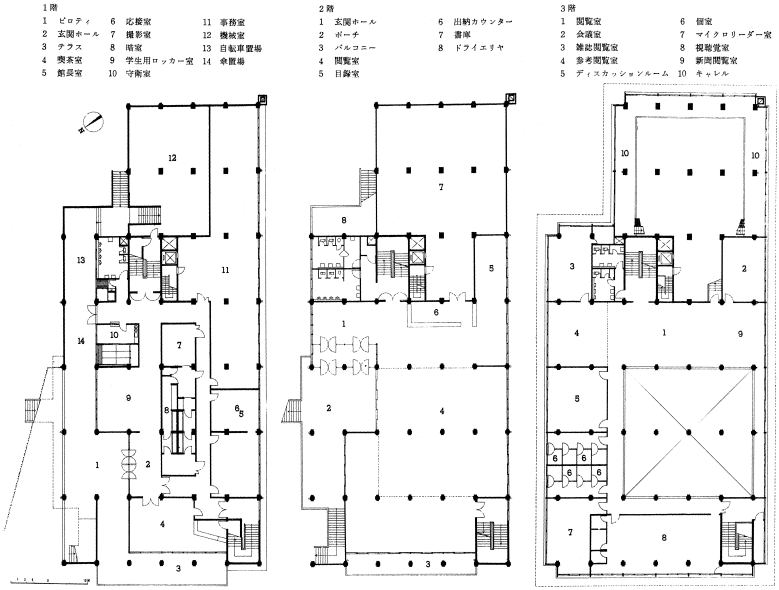
大閲覧室現状
（博物館展示室）

大閲覧室現状
（博物館展示室）

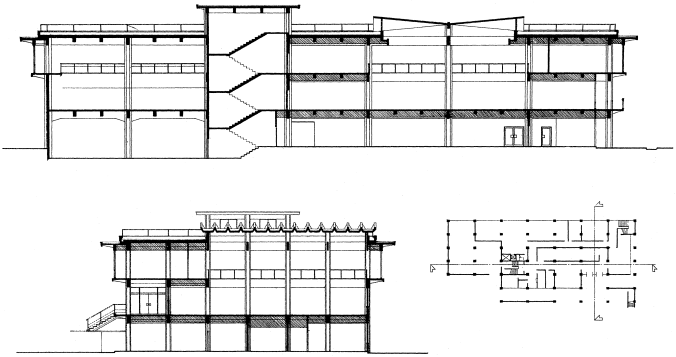
西側立面図
（施工当時、『谷口吉郎著作集第 4 巻』）

玄関および
軒廻り詳細

コンクリート打放し
柱とタイル壁



古川図書館　各階平面図　縮尺＝1／800（『新建築』、1965.2）



同断面図　縮尺＝1／800（『新建築』、1965.2）

名大史ブックレット　4

豊田講堂と古川図書館

――名古屋大学の寄付建物――

堀田典裕
木方十根

目　次

はじめに（堀田・木方）……2
一　大学と寄付建物（木方）……4
二　豊田講堂と槇文彦（堀田）……14
三　古川図書館と谷口吉郎（木方）……33
おわりに（堀田・木方）……57

はじめに

◆キャンパスの顔、豊田講堂と古川図書館

名古屋大学東山キャンパスは名古屋の東部丘陵に位置します。「名古屋大学前」バス停から東は斜面になっていて、そのなかほど、緑地帯・グリーンベルトの端部に、豊田講堂が建っています。また斜面の南側に低く水平にのびる建物は、旧古川図書館（現名古屋大学博物館、古川総合資料館、以後本書では古川図書館と呼ぶ）です。本書では、これら東山キャンパスの顔である二つの建物を取り上げます。

「豊田講堂」あるいは「古川図書館」という名称は、これらの建物がそれぞれトヨタ自動車工業（株）、そして古川為三郎・志ま両氏からの寄付による建物であることに由来します。寄付建物を見直すことは、次のようなことを考えるきっかけとなります。まず、大学と社会との関係についてです。国立大学は政府により設置された学校です。しかし、国立大学といえども社会との緊密な関係に支えられながら発展してきた歴史があり、大学が寄付建物を有するということは、それをよくあらわす事実です。

豊田講堂と古川図書館

また寄付建物には、建築のデザインに力の注がれているものが多くみられます。こうした寄付建物のデザイン的特徴が、キャンパスの他の建物、キャンパス全体の印象、ひいては大学の雰囲気そのものにまで大きな影響を与えています。

そこでこの本では、豊田講堂と古川図書館の建築デザイン上の特徴を、それぞれの設計者の考え方にまで踏み込んで探っていきます。そして、これら二棟の建築が名古屋大学にとってどう価値づけられるのか、今後大学として、遺産をどのように引き継いでいけばよいのかを考えたいと思います。

一　大学と寄付建物

◆「名前」のついた建物

全国の、あるいは世界の大学には、個人名が冠された建物が数多くあります。国内の例では、東京大学の大講堂（「安田講堂」）、早稲田大学の「大隈講堂」などがよく知られていることでしょう。ただし「名前」がつくにしてもいくつかのパターンがあります。一つは寄付者の名前が冠せられる場合、すなわち「安田講堂」や一橋大学の「兼松講堂」のような場合です。もう一つは、大学にゆかりのある教育者や研究者の業績を記念して名前が冠せられる場合で、「大隈講堂」や、最近の例では法政大学の「ボアゾナード・タワー」（東京法学校教頭ボアゾナードを記念）などがそれにあたります。

前者について、寄付者と大学の関係をみると、またいくつかのパターンに分類ができます。一つは、寄付者の業績が、その大学であつかう専門分野にゆかりが深い場合です。一橋大学の「兼松講堂」は、日豪貿易の先駆者であった兼松房治郎氏の一三回忌に際し、兼松商店から、商業教育の担い手であった東京商科大学（一橋大学の前身）へ寄付されたものです。同じよう

なものに東京水産大学と長崎大学水産学部の「中部講堂」（大洋漁業中部謙吉氏より）、鹿屋体育大学の「水野講堂」（ミズノの水野健次郎氏より）があります。こうしたいわば選択的なつながりの一方で、より非選択的なつながりもあります。まず大学出身者による母校への寄付のパターンで、鹿児島大学の「稲盛会館」（同大工学部出身、京セラの稲盛和夫氏より）がその例です。もう一つ「地縁」によるつながりもあります。名古屋大学の豊田講堂および古川図書館の場合がその例で、ともに地元の企業および企業人による寄付です。

このように、建物に「名前」が冠されている場合でもその由来はさまざまです。

◆寄付建物のデザイン

こうした寄付建物の設計には有力な建築家が設計に関わる場合が多く、彼らは必要面積や機能の充足にとどまらず、記念の内容や大学の将来を鑑みて、独自の哲学に基づくデザインで建物を設計しました。そうした例をいくつかご紹介します。

東京大学の大講堂「安田講堂」、一九二五（大正一四）年は、建築学科教授でのちに総長を勤めた内田祥三（よしかず）と、岸田日出刀による設計です。安田善次郎氏より寄付の申し出のあった翌年、関東大震災（一九二三年）によって本郷キャンパスは壊滅的な被害を受けました。震災後内田は安田講堂を皮切りにキャンパスの再建に取り組みます。研究者として建築の構造や防災を専

門としていた内田は、堅牢な鉄筋コンクリート造の建物でキャンパスを一新していきます。安田講堂のデザインは、近代的に解釈されたゴシック様式といえます。ゴシック様式とは、中世末期の建築様式です。当時すでに、こうした歴史的な建築様式を採る考え方の一方で、近代的なデザインの模索が活発化していましたが、内田はキャンパスの統一と連続性を保つために、保守的だが色やディテールの共通性を保ちやすい定番の様式を採用しました。安田講堂は、「耐火・耐震」「統一と連続性」という、内田のキャンパス復興の基本理念を体現する建築なのです。

一橋大学の前身校である東京商科大学も、震災によってとても大きな被害を受けました。こちらは早々に神田一橋校地の再建をあきらめ、郊外の北多摩郡谷保村（現在の国立市）に移転を決定します。この新キャンパスに最初に建設された本格的建物が「兼松講堂」（一九二九＝昭和四年）です。

兼松講堂のデザインは、垂直線が強調され天を刺すような安田講堂のゴシック様式とは対照的なロマネスク様式です。ロマネスクはゴシックよりもさらに前の中世中期の古拙な建築様式です。設計者は、東京帝国大学建築学科教授で、建築史と意匠を専門とする伊東忠太です。伊東は日本建築の研究の端緒をつけ、アジア建築とヨーロッパ建築とのつながりを模索することで日本建築の将来を考えようとした理論家です。その伊東はなぜロマネスクを採ったのでしょ

一橋大学兼松講堂

東京大学大講堂（安田講堂）

うか。当時の学内誌「一橋新聞」に伊東はこう語っています。

現代に必要なのは軽快な気分よりも鈍重な精神だといふ私の考えから、僧りょや敬虔な信者が刻苦してつくったローマネスクの様式は、素人ではあるが却って素人の真剣さから何ともいへぬドッシリとした気持ちが出ているのが尊いものである。

ところで東京商科大学は、単科大学や公立・私立大学の設置をはじめて認めた「大学令」（一九一八年）によって、前身の東京高等商業学校から昇格（一九二〇年）した大学です。教育社会学者の竹内洋は、世間からみて「高商は軽快で如才がない」イメージの学校であった、と表現しています。もしかしたら伊東は「軽快で如才のない」高商からの脱皮を期待して、兼松講堂に「鈍重」なロマネスク様式を与えたのかもしれません。兼松講堂以後の東京商科大学の建築もロマネスクを継承していま

す。キャンパス全体として重厚な雰囲気を作り出していて、伊東のねらいは成功したといえるでしょう。

このように寄付建物には、明確な設計理念に基づいて設計されているものが多く、その個性的なデザインによって大学の歴史が表され、キャンパスや大学の雰囲気まで影響を受けているといえます。

そして、こうした性格をもつ寄付建物として、名古屋大学東山キャンパスには、槇文彦（まきふみひこ）の設計による豊田講堂、谷口吉郎（よしろう）の設計による古川図書館があります。豊田講堂、古川図書館とも、戦後一九六〇年代、日本建築のモダニズムの成熟期に建築された建物です。

◆名古屋帝国大学創設と寄付

名古屋帝国大学が創設された一九三九年当時は、戦時体制下で軍事費の増大と不況によって国家財政はひっ迫していて、大学の創設認可には、経費の地元と大学自身による負担が条件となっていました。そこで航空機を中心とした軍需産業からの税収などをもとに愛知県が大学の創設費九〇〇万円を寄付、キャンパス用地も地元の協力で寄付されることになりました。こうした地元負担が、名古屋帝国大学創設には不可欠だったのです。同時に建設費総額一〇〇万円の講堂と図書館を建設寄付する方針が打ち出され、名古屋商工会議所によって寄付金が集めら

れました。

ところが、戦時体制下でこうした寄付金を使い切ることができないまま敗戦を迎え、戦中戦後のインフレーションによって寄付金の実質的価値が急落し、講堂と図書館の建設のためには再度資金を調達しなければならない状況になりました。このように、講堂と図書館の寄付建設の動きは創設期から進められていたわけですが、戦中戦後を経て困難な状況におちいってしまったのです。

◆講堂のトヨタ自動車工業からの寄付

勝沼総長による揮毫

敗戦後間もない日本において、億を超える資金を集めることは容易ではありませんでした。当時の事務局長の回想録には、資金集めに奔走する大学当局の姿が記されています。

寄付金集めも、歴史の古い大学でならば卒業生を中心に募金するという方法もあるが、若い名古屋大学にはその手はない。地元の財界人から数万円ずつを集めるにしても、創設時と違って今日では億という金はとても見込みはない。むしろ東京大学

の安田講堂のように、寄贈者の名が付くような個人寄付による方が可能性がある、そんな篤志家はないものかと、勝沼総長とよりより話し合っていた。

（須川義弘『半生を顧みる』）

その後、勝沼精蔵名古屋大学総長が各方面に奔走し、ついに一九五八年一一月二四日にトヨタ自動車工業株式会社（取締役社長 石田退三氏 当時）から建設寄付の第一報を受けたのです。しかも大学からの要請額一億円にもかかわらず、倍額の二億円の寄付を得ることができたのです。

設計者と施工者については、「設計は竹中組の嘱託で槇文彦ワシントン大学助教授が担当すること、建設は株式会社竹中組が請け負うこと」が、一九五九年三月二三日の評議会において正式に了承されました。

ところで講堂正面の壁には「豊田講堂」という勝沼総長の揮毫（きごう）があります（前頁）。寄贈者の社名であるカタカナ表記の「トヨタ講堂」とせず、漢字表記である「豊田講堂」とすることは、「発明王豊田佐吉翁を記念する意味」を込めて、一九五九年三月の評議会において正式に決定しました。

鍬入式は一九五九年三月二〇日に行われましたが、伊勢湾台風によって工事が一ヶ月遅延し、

鶴舞の医学部分館（左奥の建物）

旧第六連隊兵舎（明治村）

竣工予定日であった一九六〇年三月二〇日には間に合いませんでした。このため一部未完成ながらも一九五九年度の卒業式は豊田講堂でとり行われ、同年五月九日、トヨタ自動車工業株式会社の主催で晴れて竣工式がとり行われ、名古屋大学に授受されました。

◆附属図書館の歴史と建物

附属図書館は、名古屋帝国大学官制（一九三九年）に「第十七条　名古屋帝国大学ニ附属図書館ヲ置ク」とされているように、創設当初から大学の重要な一機関として位置づけられていました。当初は新キャンパスに施設がなかったので、鶴舞の医学部キャンパスの旧愛知医科大学時代（一九三二年）に新築された鉄筋コンクリート三階建ての図書館で出発しました。ちなみに、この図書館は愛知県営繕課の設計によるもので、鶴舞公園に面して建つために「都市の美観」に配慮がなされた、建築として優れたものでしたが、残念ながら病院の再開発に伴い取り壊されました。

戦後には、附属図書館は旧歩兵第六連隊が使用していた名城兵舎

に移転しました（一九四八年）。この六連隊の旧兵舎は一八七三（明治六）年に建設された白壁瓦葺の木造建築で、現在その一部は明治村に移築保存されています。

名城地区の旧兵舎は図書館用に改装されましたが、あくまでも新図書館建設までの暫定的なものでした。一九六〇年には図書館職員による建築委員会が発足し、「附属図書館建築の基本方針」の立案につづき、翌年一〇月には規模約二〇〇〇坪の「中央図書館建築計画案」を作成しています。同じ頃、名城地区を愛知県体育館の建設用地としたいという申し入れが愛知県からあり、これをきっかけに、附属図書館をはじめ本部や文学部・教育学部といった名城地区にあった組織の東山地区への移転が促進されることになりました。名城地区の名大施設の撤去を条件に、文学部・教育学部建設費の不足分と附属図書館および本部の建設費用とを愛知県が名古屋市と地元財界の応援を得てまかなうという協力が得られることになりました。

◆古川為三郎・志ま両氏による寄付

その後関係者が地元経済界に資金援助を要請していたところ、当時の杉戸清名古屋市長の斡旋などによって、日本ヘラルド映画株式会社会長古川為三郎・志ま両氏の篤志を得られることになりました。小橋博史による伝記によると、名古屋市の関係者から寄付の相談がもちかけられた際、古川為三郎氏は当初、約二億円の寄付依頼の半分の一億円を出すということで、あと

古川夫妻を記念するレリーフ

は財界から寄付してもらうようにと返答したのですが、志ま夫人の強い後押しで二億円全額寄付が実現したということです。当時の逸話を古川氏はこう語っています。

わしが図書館を引き受けたので、学長さんはとてもうれしかったんでしょう。靴をはくのも忘れて車に乗って帰られ、途中で気付いて戻ってこられた。それくりゃあ、うれしがらしたものだ。人の喜びというのは素晴らしいもんだよ。

（『朝日新聞』一九八七年一月三一日夕刊）

古川夫妻の意向により、設計は東京工業大学教授谷口吉郎、施工業者は大林組と決りました。総予算と坪単価から、建物の規模は延面積で約

一〇〇〇坪とされたので、建築委員会は従来の計画案を白紙に戻し、さきの「附属図書館建築の基本方針」をもとにした新たな計画を作成し、設計者に伝えました。以後、設計者から提示された平面図には何度も修正が加えられ、一九六三年一二月に工事が着手されました。

二　豊田講堂と槇文彦

◆豊田講堂の概要

豊田講堂は、一九六二（昭和三七）年度日本建築学会賞を受賞しました。『建築雑誌』に掲載された受賞推薦理由には次のように書いてあります。

この講堂は新しく発展した名古屋市の郊外に建設された名古屋大学の広い校内の中心に建てられたもので、総面積六二七〇平方メートルの内部には一六〇〇を収容する講堂のほかに、大学総長室、会議室等を含み、さらに入口の両翼に広い空間を設けて、学生の集会に便ずるなど、大学の中心建築としての多目的な機能をよく解決している。その外観は構

造体と材料感を力強く表現し、その内部は音響効果と造形的空間をたくみに構成しているが、特に注目される点は学園としての環境計画である。一二〇メートルに及ぶ広い前庭には八〇メートル角の広場を設けて学生のための野外集会に当て、さらにその空間は建築内のピロッティーに接続して、建築内部を経て背面の岡にまで延長しているために、建築の内外に豊かな環境美が発揮されている。同時に建築の設計に示されている新鮮な意匠感覚は学生たちにいきいきとした共感を与えるであろう。この意味において、この講堂は建築の機能と共に学園の環境計画に効果ある設計を発揮したものといい得る。よって、この作品に対し日本建築学会賞を贈るものである。

（『建築雑誌』一九六三年八月号）

この文章を読むと、ひとつの建物としての評価はもちろんのことですが、外部空間をふくめた「環境美」が積極的に評価されたことが読み取れます。豊田講堂は、細い角柱と建物外周に設けられた耐震壁によって支えられた大屋根によって生み出された巨大な架構のなかに、講堂本体・会議室等の機能に応じた諸空間が収められています。一方、前庭と呼ばれる外部空間は「野外演壇」や大階段を介して「裏庭」へと続いていく連続した床面として捉えることができるでしょう。床面から垂直に立ち上がった時計台は、大屋根を貫通して立体的な造形によって

巨大な架構と床面を結びつけています。ここでは、「架構」・「造園」・「空間構成」・「素材」という四つの観点から「学園としての環境計画」の原点を探ってみましょう。また、豊田講堂には、現在三種類の設計図が残されています。これらの豊田講堂の設計図として残されている三種類の図面を見比べてその設計過程について検討してみます。

◆「メガストラクチュア」としての架構

グリーンベルトの幅一杯に建てられている豊田講堂は、七九・八メートル×三六・〇メートルの大屋根がおおよそ五〇センチメートル×八〇センチメートルの偏平した角柱と、建物外周に設けられたコ型またはH型の平面形をした耐震壁によって支えられています。地震力の対処から要求される構造壁をバットレス（控え壁）として建物外部へ放り出す代わりに、垂直荷重を支持する柱は思い切り細くなっています。鉄筋コンクリートによる巨大な構造物なのですが、構造計画を工夫することによって成し得た列柱の細さは、この架構をとても軽快なものにしています。ピロティと呼ばれるこの列柱の下に立って初めて感じる空間の巨大さは、レイナー・バンハムが「現代のサブライム（崇高性）」と呼ぶ「メガストラクチュア」に他なりません。豊田講堂は日本における「メガストラクチュア」を具現した最初期のものとして評価できますし、それまで日本において支配的であった鉄筋コンクリート造の架構表現とはかなり性格の

異ったものです。

では、豊田講堂における列柱と大屋根からなる巨大な架構は一体何を意味するのでしょう。槇はこの建物のことを「門としての建物」といういい方をしています。名古屋大学には明確な正門が存在しません。門扉のないキャンパスにおける大学の「門」、それは東山キャンパスに槇が与えたひとつの準拠枠だったのではないでしょうか。豊田講堂の竣工写真（口絵）をみると、「茫漠たる」風景が広がるなかに忽然と建物が建てられていることがみて取れます。豊田講堂の列柱と大屋根からなる巨大な架構は、グリーンベルトが形成する軸を受けとめる建物という意味において、正しく「メガストラクチュア」としての「門」です。しかしながら設計者である槇自身にとっても、同様に重要な準拠枠となったのではないでしょうか。後述するように「相対性」を重んじる槇にとって、「メガストラクチュア」という所与の準拠枠が必要であったと思われるのです。丘陵の地形と、グリーンベルトが形成する軸という土木的なスケールの他には何の手掛かりもない敷地において、様々な建築的なスケールの空間を収めるためには、両者を調停するスケールを備えた空間が必要であったに違いありません。大屋根と列柱による巨大な架構が生み出す空間の造形は、見事にこのスケールの問題を解決しているのです。

◆「微地形」の操作による造園

次に、豊田講堂の床面の造形について考えてみましょう。槇は豊田講堂の設計主旨に次のように書いています。

> 将来予想される学園の軸としてつらぬく一二〇mの並木道路の末端に位置するところに、大きな石の広場をもうけ、それにまたがる仁王門のよう建物が前方の茫漠たる空間と対し、そこで一応区切りがつけられる。さらに階段と、高いピロティを通して後方の東山の丘陵のもつ静かな雰囲気へと空間が導かれていく。
>
> （『新建築』一九六〇年八月号）

土地の起伏という観点からみた豊田講堂の配置は、なだらかな傾斜をもった斜面の終点であり、勾配が急に大きくなる変極点となる場所に建てられているといえます。竣工当時にピロティ下の階段や前庭から、戦災復興計画にもとづいて発展していく名古屋の街を望む風景の素晴らしさは、今も想像に難くありません。反対に四谷通から豊田講堂を眺めた時には、前庭のパラペットが生み出す水平線は、豊田講堂の基壇となっています。前庭が「五〇〇〇人の集会のために」設けられた動的な広場となっているのに対して、講堂の脇を通って自然にたどりつ

立正大学熊谷校舎総合計画
（『現代日本建築家全集19』）

大高正人、坂出人工土地
（『新建築』、1968年3月号）

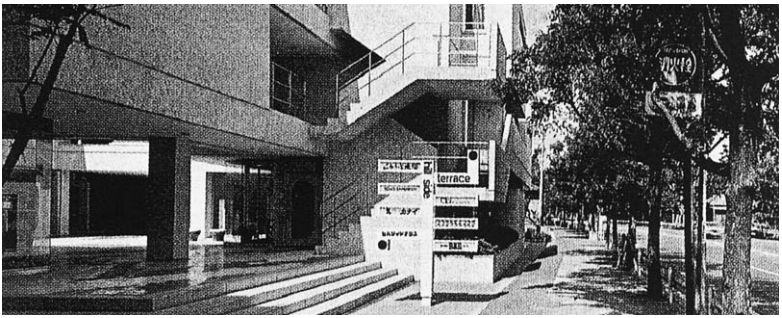
くところにあるロビーと裏庭は、丘陵の斜面を背景とした静的な空間がつくられています。この動と静という二項対立による造園を結び付けているのがホールの両側にあるピロティです。前庭からピロティを抜けて裏庭に連続する動線は、のちに槇が提示する「奥」という概念の萌芽として読み取れるのではないでしょうか。

槇は一九六〇年代に大高正人と「人工土地」に関する数編の論文を書きました。しかしながら、槇の「人工土地」に関する関心は、大高の「坂出人工土地（一九六六〜七四年）」に代表される当時ほかの多くの建築家が取り組んだ、さまざまな機能を大規模に積層させるやり方とは

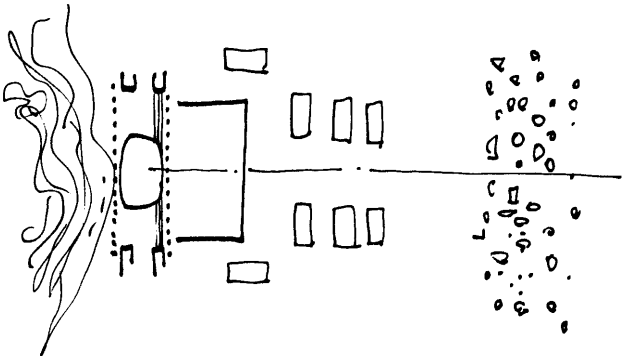
少々異った方向へ向かっていきます。彼はその後、地理学で用いられる「微地形」という言葉を援用しながら、設計の与条件となる周辺環境をほんのわずかな大地の起伏として形態に還元しようとします。言い換えれば、建物が地面に接地するレベルのわずかな変化を再編しようとしているともいえるでしょう。「立正大学熊谷校舎総合計画（一九六七～六八年）」や「代官山集合住居計画（一九六九～九九年）」に顕著にみられるこうした床面の造形は、豊田講堂においてその原形がみられると思われるのです。

◆アシンメトリーの空間構成

ところで配置だけをみれば、豊田講堂は大学整備の骨格としてつくられたグリーンベルトの軸上に建てられており、きわめてモニュメンタルな建物です。スケッチをみると確かにシンメトリー（左右対称）な図が描かれています（次頁）。しかしながら、講堂本体はグリーンベルトの中心軸よりもやや北側の場所に据えられていますし、時計台も中心軸から外れた南側に偏った位置に建てられている上に、総長室・貴賓室・会議室などの諸室が大屋根から吊られるように設置され、全体としてアシンメトリー（左右非対称）な立面構成をしています。受験雑誌でお馴染みの東京大学の安田講堂や教養部時計台をはじめとして、中央に時計台を頂いたシンメトリーな空間構成を持つ建物は戦前の帝国大学キャンパスのシンボルでした。同時に近代



代官山集合住宅計画第Ⅱ期（『新建築』、1973年10月号）



豊田講堂エスキース（『現代日本建築家全集19』）

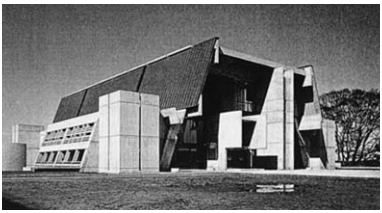
日本がめざした中央集権的な国家システムを具現したものでもあったといわれています。これらの戦前の事例に対して名古屋大学の豊田講堂は、グリーンベルトという大きなスケールでは軸を受けてシンメトリーに建られていますが、実際の機能に対応する小さなスケールではアシンメトリーな空間構成が取られているとみることができるのです。つまりこのようなアシンメトリーな空間構成は、前述した「メガストラクチュア」としての架構がシンメトリーな軸

に取って代わり、全体の秩序を保証しているために成立し得たといえるでしょう。こうしたアシンメトリーの空間構成には、正門をもたない大学という名古屋大学のキャンパス理念によく応答していると思われます。

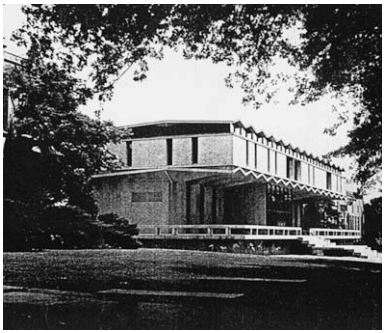
槇は一九六五年に設計事務所を始める前に、名古屋大学豊田講堂・ワシントン大学スタインバーグホール（次頁）・千葉大学記念講堂（次頁）という三つの建物を設計していました。これらに共通する点は、いずれも「人工土地」の上でアシンメトリーな位置にエントランスが設けられた建物が建てられていることです。とくに名古屋大学と千葉大学の講堂では、ホールが「人工土地」である前庭に対してアシンメトリーに配置されており、床石のパターン割についても酷似しています（次頁）。両者は立体的には全く異る空間ですが、千葉大学の平面形は名古屋大学の列柱と大屋根からなる架構を取り除いた状態として捉えることができるのではないでしょうか。槇は豊田講堂の竣工後に「（講堂本体さえも）外部と隔絶されているところに不満が残った」といっていますが、この平面形の相似を考えれば大いにうなずけます。

◆コンクリートという素材

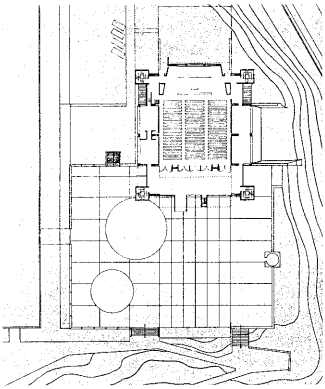
今度は豊田講堂に用いられている素材についてみてみましょう。基本的には構造体である打ち放しコンクリートが素地のままむき出しになっています。バンハムは、一九五〇年代から六

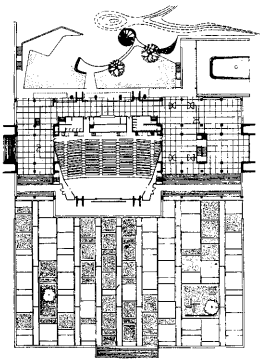


千葉大学記念講堂（『新建築』、1964年12月号）



ワシントン大学スタインバーグホール（Architectural Forum, 1961 /8）

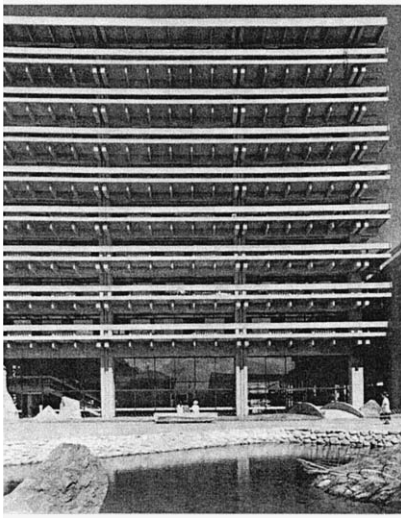




豊田講堂と千葉大学記念講堂の配置図比較、右が豊田講堂、左が千葉大学記念講堂（『現代日本建築家全集19』）

〇年代にかけて世界中で展開されたこうしたコンクリートによる荒々しい表現を「ニュー・ブルータリズム」と呼びました。一方、一九五〇年代の我が国の建築界は、日本建築の伝統をいかにして現代建築として反映することができるかという議論、いわゆる「伝統論争」がとても盛んでした。槇の東京大学時代の恩師である丹下健三による「香川県庁舎（一九五八年、次頁）」に代表されるように、打ち放しコンクリートによって日本建築の伝統を表現する「日本的コンクリート打ち放し」という手法が席捲（せっけん）していました。ところが槇が「二五才から三五才までの一〇年間の間に日本を距離をもって見たというその経験」は、こうした「伝統論争」とは無縁の立場に彼を至らしめることになったのです。豊田講堂の打ち放しコンクリートは、槇が「日本的コンクリート打ち放し」に終止符を打ち、「インターナショナルなコンクリート打ち放し」へ移行させようとする道標であり、槇文彦というひとりの建築家の内部に起った両者の葛藤であったと考えられるのです。

豊田講堂はコンクリート打ち放しの灰色の建物という印象が強いと思われますが、決してそのようなことはありません。豊田講堂に代表されるこの時期の打ち放しコンクリートをもう少しよく眺めてみると、現代の平滑な表面と少し違うことに気づくと思います。一〇センチメートル程度の幅をもった木の肌目が淡くコンクリートの表面にみて取れます。それはコンクリートを打ち込む際につくられる型枠の痕跡ですが、この木製型枠の跡は現代建築の打ち放しコン



丹下健三、香川県庁舎（『新建築』、1959年１月号）

クリートとは異る独特のスケール感と、型枠職人の確かな手の跡を感じさせます。また講堂本体と会議室部分にはヘキサイトが白塗りされており、架構とは異なる表現がなされています。その結果、架構のなかに講堂本体と会議室部分が構造体から浮んでいるようにみえるのです。さらに床には、玉砂利洗い出しという手法によって黒・赤・緑・白色をした小石が、コンクリートの中にそれぞれ矩形の色面を構成するように埋め込まれています。これらは一九五〇年代の建物に顕著なディティールですが、ここではそれらの素材が、コンクリートという素材に対してバランスよく用いられているといえます。

また素材という視点からみても、槇によって同時期に設計された千葉大学や立正大学などの講堂建物よりもきめ細かい設計がなされているといわれています。竣工当時の建築雑誌には、豊田講堂の設計者は「設計顧問 槇文彦、設計施工 竹中組」として紹介されています。これらのディティールが竹中組（現、竹中工務店）の確かな施工技術に裏打ちされていることはいう

までもありません。加えて当初予算の倍額である二億円というトヨタ自動車工業株式会社の潤沢な寄付金によって高い完成度を誇る建物となったといえましょう。

◆設計過程

さて、豊田講堂はどのように設計が進められてきたのでしょう。豊田講堂には、現在三種類の設計図が残されています（口絵）。一つは、大学施設部に残されていた最初期案と思われる図面（正確な時期については不明、図A）です。残りの二つは雑誌上に発表されたもので、計画案として『新建築』一九五九年七月号に掲載された図面（図B）と、同じく『新建築』一九六〇年八月号に掲載された完成図面（図C）です。これらの三種類の図面を比べると、まず架構については図Aでは柱間寸法が東西南北両方向において均等に割り付けられていますが、ほかの二つのでは南北外周の耐震壁形状がコの字型に変更され、東西方向の柱間が大小二つの寸法からなっていることがわかります。図Aにみられるように均等に割り付けられた各柱間には、それぞれ小さなトップライトを備えたドームが架けられており、現況のコンクリートシェル構造によるひと続きの大屋根とは全く異った様相を呈しています。造園については三枚とも異っていますが、いずれもアシンメトリカルな設計となっており、大きな変更点はありません。また図Aにおいては時計台が建物外部である裏庭に設計されていますが、この位置に建てられた

時計台は、人目に付きにくいものになっていたと考えられます。また同じく図Aにおいては講堂本体が架構から突出しており、前庭の演台に大きなプロセニアムが設けられていることが読み取れ、野外劇場としての前庭に対するイメージが当初からあったことがうかがえます。

◆建築家としての初仕事

ところで、豊田講堂の竣工式の写真を眺めると、勝沼総長、石田退三トヨタ自動車工業（株）社長らに並んで一人の青年が座しています（二九頁）。豊田講堂の設計者である槇文彦です。当時、若干三三歳でした。豊田講堂は彼にとっての処女作となりました。ここでは、その後日本を代表する建築家となった槇文彦について若干の紹介を行い、彼の初期作品における豊田講堂の位置づけについて検討を加えることにします。

◆「インターナショナルな感性」

古川図書館の設計者である谷口吉郎が東京大学工学部建築学科を卒業した一九二八年、槇は東京の山の手に生まれました。槇は、東京大学の卒業に際しては辰野賞を受け、同大学院の丹下健三研究室に進学しました。ほどなくして彼はアメリカへ留学し、クランブルック美術学院を経てハーバード大学大学院にて建築学修士を取得し、ひとりの建築家としての道を歩み始め

槇文彦　年譜

年	出　来　事
1928　(S.　3)	東京生まれ、慶応義塾大学普通部・工学部予科を経て
1952　(S.　27)	東京大学工学部建築学科卒業（辰野賞） 同大学大学院丹下健三研究室を経て
1953　(S.　28)	クランブルック美術学院修了（建築学修士）
1954　(S.　29)	ハーバード大学大学院修了（建築学修士）
1954-56（S.29-31）	ＳＯＭ建築事務所
1956-62（S.31-37）	ワシントン大学建築学部準教授
1962-65（S.37-40）	ハーバード大学大学院デザイン学部準教授
1965-　(S.40-　)	槇総合計画事務所
1979-89（S.54-64）	東京大学工学部建築学科教授

ました。

一九五八年の夏、ワシントン大学準教授の職にあった槇は、若手芸術家をサポートするグラハム財団のフェローシップに選ばれます。欧州・中近東・東南アジアの建築視察旅行にその後の二年間を費やしました。先述した名古屋大学豊田講堂・ワシントン大学スタインバーグホール、千葉大学記念講堂という三つの作品は、この世界旅行の最中に設計されました。

槇の母方の祖父は、日本の代表的な建設会社のひとつである竹中組社長であった竹中藤右衛門です。トヨタ自動車（株）は、名古屋大学に講堂を寄付するにあたって建設会社として竹中組を指名しました。潤沢な奨学金をもとに世界旅行を続ける槇が「ブラブラ遊んでいたように見えた」竹中藤右衛門は、豊田講堂の設計を任せることにしました。その結果、彼は「その後二年間は旅行の合間に設計をし、工事も監理もする」ことになったといいます。したがって豊田講堂はこの世界旅行の道中に設計されたのものであり、正しく「インターナショナルな感性

豊田講堂竣工式写真（大学史資料室所蔵）、右端が槇文彦

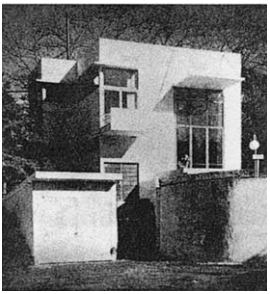
（原広司）」にもとづいた空間が形成されたといえます。槇はインドで現代建築の巨匠の一人であるル・コルビュジェに豊田講堂の設計図面をみせる機会を得ました。槇はその時のことを次のように述懐しています。

かつてシャンディガールを訪れた時、たまたま滞在中だったコルビュジェが当時、名古屋の「豊田記念講堂」の設計中の図面を持って歩いていた私に、わざわざ親切に批評をしてくれた。その時彼は、耐震壁に埋没した柱をさして「できるだけ柱を自由にしてあげなさい」といったのを、いまでもよく覚えている。

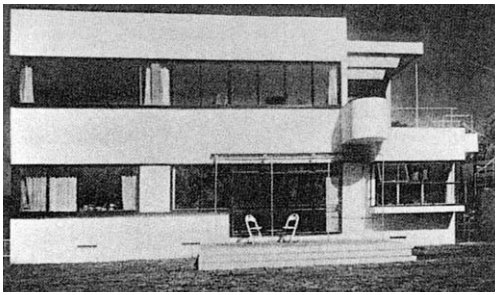
（『新建築』一九七八年四月号）

◆グロピウスとの出会い

槇が入学したハーバード大学建築学部は、バウハウスを起こしたワルター・グロピウスがナチス・ドイツによる迫害を逃れてアメリカにたどり着いた先でした。槇が留学した時期には、グロピウス本人はすでに引退していましたが、彼の影響がとても濃厚な教育がなされており、その独特の気風は「ハーバード・スクール」と呼ばれていました。槇はグロピウスの自邸をたびたび訪れて私淑したといいます。しかしながら、槇とグロピウスとの出会いは、その時が初めてではありませんでした。少年時代に近所でみた土浦亀城（かめき）という建築家が建てた自邸（一九三五年、次頁）と、谷口吉郎が設計した佐々木邸（一九三三年、図）は、グロピウスの影響を大きく受けた住宅でした。槇が「僥倖」だったと後述しているこの白い瀟洒（しょうしゃ）な住宅に対する原体験は、グロピウスの「ハーバード・スクール」を経由して、槇の意匠上の骨格を形成したといえます。槇から見て一世代前の建築家達は、伝統的な日本建築の中に「モダニズム」の精神を見出し、日本建築を西洋建築社会に翻訳することに腐心しました。その典型が丹下健三の第二次世界大戦後のＣＩＡＭ（シアム）（近代建築国際会議）を通じて行った活動であり、前述した「伝統論争」の原動力のひとつとなったと考えられます。これに対して槇は、「モダニズム」を日本建築の伝統と切り離してみることができた戦後初めての建築家であったといえるでしょうし、この意味において豊田講堂が日本の現代建築に与えた影響はとても大きかったと考えられます。



土浦亀城、土浦亀城自邸（『新建築』、1935年3月）



谷口吉郎、佐々木邸（『国際建築』、1933年11月）

◆「相対性の建築」

では、「ハーバード・スクール」において槇が学んだことを考えながら、彼の建築空間の特質について検討してみましょう。槇の言説によれば、「「スケール」ということを（師である）ホセ・ルイ・セルトから、「場所性」ということを（友人である）アルド・ファン・アイクから学んだ」といっています。「スケール」にしても「場所性」にしても相対的な関係のうちに成立するものです。彼は決して自らの主張を声高に披瀝するようなタイプの建築家ではありません。むしろ控えめなほどですが、この控えめな立ち居振舞いが建築を取り巻く諸条件に対して、極めて客観的な視点を与えているといえます。槇は設計をする際に、建物を自己目的的に取り扱うことなく、周辺環境の中で（多くの場合それは「都市」という問題設定に還元されることが多いのですが）、公共の場所を形成する要素として取り扱います。すなわち彼の設計は、与条件や自らが設定した条件の本質を的確に捉え、それらを熟慮した上での回答であり、

集合体における三つの典型、右から順にコンポジショナル・フォーム、メガ・フォーム、グループ・フォーム（『現代日本建築家全集19』）

周辺環境との折り合いの結果にほかならないのです。

一九六〇年、東京で開かれた世界デザイン会議のために、「メタボリズム・グループ」の一員として大高正人ともに「群造形」という建築概念を提示しました。さらに槇は豊田講堂が竣工してから四年後の一九六四年、一冊の著書をワシントン大学から出版しました。この著書が世界の建築家に与えた影響はとても大きく、バンハムによる『メガストラクチュア』の補遺にも、この論文が収録されています。'Investigations in Collective Form'（『集合体に関する研究』）と題された赤い表紙のこの小冊子において、槇はさまざまな機能が複合する巨大構築物に見出される形態上の論理を指摘しており、その際「単体として完結した建物」ではなく形態相互の相関関係に着目しています。それは、建築空間としては建物の集合に際して公共的な用途をもった内部でも外部でもない半外部空間という「どこでもない空間」の造形に他ならず、それが槇の造形上の発見だったのではないでしょうか。この集合に際する要素間の形態上の相対的な関係が、上述の「場所性」と「スケール」という問題として帰着していると考えられるのです。しかも、このような槇の

「相対性の建築」こそが、建築文化における西洋と日本という図式を相対化させることにつながったと考えられましょう。

三　古川図書館と谷口吉郎

◆古川図書館のデザイン

ここでは、古川図書館のデザインを具体的に検討して、その特質について考えていきたいとおもいます。

まず古川図書館が、雑誌『新建築』に発表された際の設計要旨をみてみます。

名古屋の実業家古川為三郎および志ま夫人によって、寄贈された名古屋大学の図書館は、戦後千種区に移転した広大な同大学の中央広場に建てられた。この図書館は従来の大学図書館が書籍の保存と閲覧とを主な目的としていたのにたいして、さらに新しい図書館の要求に応じて、文献のサービスと総合研究の便宜をはかるために、館内に複写施設と共同研

究室の諸室を充実させた。

建築構造は鉄筋コンクリート、三階建て、柱間（はしらま）は四・二メートル×八・四メートルの矩形を平面計画の構成単位とする。階高は三・七五メートル、入口は傾斜地を利用して、一階と二階とに設けられ、来館者の便宜をはかっている。

広場に面した北側の正面入口から二階に入ると、一七六人を収容する閲覧室があり、その上部は吹きぬけとなる。南側の大きな窓と折板状の天井に設けられたクリアストーリーによって、室内の採光と音響に思索的な気分がそえられている。閲覧室からは受付をへて書庫へ直接出入りできるので、書架との連絡も密接である。

書庫の内部は二階分を三層として使って収容量の増大をはかり、蔵書数は約二十万冊、上層部分の壁を外壁に突出させ、書庫内閲覧所（キャレル）を広く設け、将来は東側に書庫の増築が可能である。

三階は主として共同研究室にあてられ、視聴覚室、マイクロリーダー室、演習室、会議室、研究個室、展覧会場などが吹き抜け上部の周囲に並ぶ。一階は管理部門となり、とくに文献サービスのために事務室、撮影室、現像室、印刷室、乾燥室が設けられ、そのほかに館長室、応接室、学生用ロッカー室などがあり、喫茶室からはテラスの明るい窓を通して、スロープの向こうに名古屋市のスカイラインが遠望される。

設計要旨では、主に施設の内容面と機能面についての工夫を中心に述べられていますが、そこには大学側の建築委員会による「名古屋大学附属図書館建築の基本方針」の趣旨がよくいかされています。閲覧室の吹き抜けと一階の喫茶室とテラスに関しては、空間の雰囲気についてのコメントがなされており、このあたりにデザインの主眼をおいていることがわかります。

◆立地と配置

建設位置は、谷口が設計に関与する以前の一九六一（昭和三六）年一二月の整備計画委員会で、「豊田講堂前庭の南側」と定められていました。配置についても、北側は学内道路、南はキャンパス用地境界に規定されるので、あまり検討の自由度はなかったといえるでしょう。

ただし、設計要旨にコメントがあるように、エントランスを一階と二階の両方に設けたことをふくめて敷地の高低差をうまく利用している点に設計者の手腕が感じられます。三階建だが北側正面からみると、あたかも二階建にみえるような建て方をしていて、そのことによって量感がなく、水平にのびやかに展開するような印象の建物となっています。簡単なことのようですがデザイン的に決定的なポイントの一つが、この敷地条件の利用のしかたにあるといえるでしょう。

◆東西と南北での「柱間」の違い

もう一つ決定的なデザインのポイントがあります。それは、建物の骨格を規定している柱割り（柱の位置どり）です。設計要旨に「柱間は四・二メートル×八・四メートルの矩形を平面計画の構成単位とする」とあるように、東西の柱間が南北の二分の一という、いわば扁平なグリッドパターンで建築の平面が構成されています。常識的には、七メートル前後のできるだけ均等なグリッドとするのが、構造的、経済的に有利であるとされています。体育館やホールのような柱のない大空間が必要な場合に、一方向の柱間を極端に大きくし、もう一方に柱を細かいピッチで入れることはあります。古川図書館の場合は単なる大空間の必要から長手と短手が異なるグリッドで柱割りがなされているようにはみえません。そうであるならば、建物の長手方向の柱間を短くするほうが自然のような気がしますし、実際谷口も他の作品ではそのような柱割を採用して、大空間を確保しています。

この柱割りの意図を読み解く鍵は、敷地が周辺の建築的環境から影響されて帯びている性質、それを建築的なコンテクスト（文脈）といったりしますが、そこにあると思われます。古川図書館の敷地において、絶対に無視できないコンテクストは、グリーンベルトがもつ非常に強い「方向性」です。谷口は、これに対抗せず、むしろそれを利用しようとしたのではないかと思うのです。

つまり、東西方向の柱間を長くすることで、空間に東西方向に引き延ばされたような「ひずみ」をあたえ、空間の「長さ」を印象づけようとしている。西に開かれたエントランスから動線を導き、百八十度振り返って閲覧室の吹き抜け空間を、これまた東西方向に一望する。そして「長さ」の先には、バルコニー越しに名古屋の街の遠景がみえる。こうしたシークエンスを、演出するための柱割りなのだと読むことができます（口絵）。こうしたシークエンスの演出と「長さ」に対する執着には、後述の「藤村記念堂」の影がみえる気がします。なお一階の西側には、当初喫茶室が設けられていて、ここからは名古屋のスカイラインが遠望されることが意図されていました。

◆雁行型の構成

つぎに、立面（建物の姿）をみていきましょう。古川図書館は正面のはっきりしない建物です。北側からみると右手に柱間で五スパン分の張り出した部分があり、左に二スパン分奥に引っ込んだ部分があります（口絵）。一見すると雁行（がんこう）型（雁の飛行隊形のように図形が斜めにずれながら連ってできあがる形）にみえます。実際には南側の壁面は一直線に通っていますから正確には雁行型ではありませんが、ここではいちおう雁行型ととらえておきます。

雁行型の構成は、一般的には立面を分節化し、それによって建物の大きさや長さの印象を和

らげる効果があります。そのほか、敷地の形状に建物を素直に順応させる場合にも有効な構成方法です。さほどの大規模建築でもなく、敷地形状が制約となるわけでもない古川図書館にそうした手法を用いることは必ずしも不可欠ではないように思われ、むしろ先ほどいった「長さ」の強調と矛盾するようにみえます。

ここでの分節化は、将来東側書庫部分を増築可能な計画としているため、将来の増築によって建物全体の大きさが変化しても、北側エントランス付近の立面のプロポーションが変化しないようにして、建物の印象を保持するための配慮であると考えられます。

このように、一見デザインのコンセプトと矛盾するような形態の操作にはデザインの耐久性への配慮があるのです。

◆古典主義の面影

北立面の雁行による左右非対称の構成と対照的な表情をみせているのは、西立面、山手通からもっとも目につく立面です（口絵）。この立面は一転して左右対称の構成で、先ほどの柱間の短いほう、四・二メートルの間隔で柱が並んでいます。二階部分にバルコニーが設けられていますが、それを外してみれば、ギリシャ神殿のような列柱が並んでいるようにみえます。実はこうした古典主義（ギリシャ・ローマの建築を範とする建築様式）的な性格が同居するのも

谷口らしい一面なのです。

谷口は後述のベルリン滞在の際、ドイツ新古典主義の建築家、カール・フリードリッヒ・シンケルの建築を丹念にみてまわり、『雪あかり日記』でそれらをくわしく論じています。そこにはシンケルの建築の厳格な秩序に感動するようすがあらわされています。谷口は渡欧以前から、モダニズムの機械的な建築論に対しては批判的であり、そうした視線をもって渡欧した谷口は、シンケルの建築のもつ古典的な秩序美に学ぶべきものを見出したのです。

谷口がヨーロッパで習得したものが、古川図書館の西立面には映し出されています。

◆「線に詩趣あり」

無名戦士の廟（ベルリン,1816-18,
K. F. シンケル,(c)E. Lessing）

私の製図版の上にあった製図紙に、やわらかい鉛筆で一本の線を引いてみた。すると紙背を透して幾本もの線が見えて来た。最初の一本は磨かれたステンレスの細い線である。光に渋さがあり知性が漂っていると思った。次は、清らかな、しかし、底光りのする柔かい線である。よく見ればピンと張った絹

糸であった。その次は、みやびやかだが、それでいて風流でもない早春の梅林が見えてきた。線だと思ったのは一条の光芒であった。

最後に見えたのは、名工の作でもあろうか、細くて慎ましやかなタテシゲの美しい木格子だった。まぎれもなく谷口先生の映像のように思った。

（村野藤吾「線に詩趣あり」、一九八一年）

建築家、村野のいうとおり、谷口の作品を映像的に眺めると、「線」の要素の多いことがわかります。古川図書館も、まさにそうした谷口の作風を代表するような表情をもっています。さらにいうと、谷口はこの古川図書館によって「線」に新境地を開いたのではないかとも考えられるのです。

古川図書館では「面」が消されている、つまり普通に設計すれば、のっぺりと無表情な外壁面が生じるところを、細部の工夫でそうみえないようにしています。まず庇や最上階の張り出し、ポーチなどで水平方向に層状に分けています。さらにそれぞれの層をみても、最上階では窓を水平連続窓とせず四・二メートル毎に境壁を入れて分割しています。下層階ではピロティを設けたり柱を壁から突出させて、柱を強調しています。それでも残った柱間の壁部分には、深い褐色の釉薬を施したタイルが貼られ、焼け具合や光の具合によって微妙に異る色合い

によって面に深みが与えられています（口絵）。こうして「面」が消されることによって、替わりに「線」が強く印象づけられているのです。

さらに細かい部分をみると、その「線」をいかに細く美しくみせるか、そのための工夫がみられます。

まず、水平方向の線的要素である、庇と最上階持ち出し部分の出桁（だしげた）についてみてみましょう。これらはいずれもコンクリート打ち放し仕上げとなっていますが、断面が小さく非常に軽快な印象を受けます。断面図をみると、庇部分では、最上階持ち出し部分に比較的大きな断面の桁を配し、そこからさらに先に、今度は断面の小さな桁を通していることがわかります（口絵）。大きいほうの桁は庇の奥に控える格好になりますから、実際のみえ方としては、最先端の断面の小さな桁が全体の印象を決めます。また、庇や最上階持ち出し部分の軒裏では、庇や出桁を支える片持ち梁を軒天井で覆うことなくみせています。このことによって、最先端の出桁の線材としての軽快さが際立ちます。また柱にとりつく片持ち梁は、あたかも二本の材が束ねられているかのような断面形となっていて、構造面から必要となる断面積を確保しながらも繊細にみえるようになっています。このように建物全体の伸びやかな印象を決定づけている庇と出桁あたりには、細心のデザイン的工夫がなされています。

次に垂直方向の線的要素をみましょう。最上部の窓を分割している境壁は、先端部で九七ミ

リまで絞り込まれています。部屋側のサッシの取り付け部分ではもう少しゆとりのある寸法になっていますから、これも先端部を細くみせるための工夫です。さらによくみると、その先端部分は、特別な形状をしたタイル（役物（やくもの）タイル）で覆われ、中央に三ミリのタイル目地が垂直に走っています。こうしたミリ単位の工夫によって、タイル貼りのコンクリート壁が、目通りよく仕上がっています。

下層部あるいは内部の柱は、十字形断面をしています。これも柱を細く印象づける工夫です。さらに、柱と梁・桁との取り合い部分では、決して柱と梁・桁を同一仕上げ面で合わせることなく、柱の線、梁・桁の外形線ができるだけ残るような繊細な納まりをみせています（口絵）。

◆光と影

先ほどみた、庇を軽くみせる工夫、十字形柱によって細くみせる工夫、柱と梁・桁との取り合いの工夫は、陰影によってその効果が決定的になります。またみせるべき要素、例えば最上階の窓の境壁は明るいクリーム色のタイルで仕上げられ、光によってその先端はシャープに輝きます。ディテールの工夫には、光と影によって生まれる効果が計算されているのです。

光に関してこのほかに言及しておかなければいけないのは、閲覧室にあてられた中央吹き抜け部分についてです。ここを二層吹き抜けにし、さらにその天井も抜いて天窓のように扱って

いるのは「ヨーロッパのこの種の古い建物の雰囲気に倣(なら)ったもの」だということです。ただし「肝心の天窓からの採光に誤算があって所期の効果を挙げるにはいたらなかった」とコメントされています。推測ですが、おそらく天井の折板の仕上げに用いられた吹きつけ材の粒度に誤算があったのではないかと思います。

しかし、この空間が古川図書館の最も魅力のある部分であることには変わりありません。この豊かな吹き抜け空間が作られていたからこそ、その後資料館としても使うことができたわけです。ただし現状では数々の簡易間仕切りによって東西への空間の伸びやかさが失われているのがとても残念です。

◆打ち放しコンクリートと柱の装飾性

柱など外部の「線」的要素は、コンクリート打ち放し仕上げとなっています。当時のコンクリート打ち放しは、現在のような合板型枠ではなく杉板などを用いた型枠が一般的でした。現在でも凝った打ち放し仕上げをする際にはその種の型枠が用いられますが、それは型枠につかう木材の木目や節が微妙にコンクリート面に転写されて、ぬくもりがある素材感が得られるために好まれるのです。先ほどみた柱や梁のディテールや納まりと相まって、古川図書館のコンクリート打ち放しの部材は、木材のような表情をもっています。

実はこうした柱や梁のディテールは、それ以前の谷口の作品でも、あまりみられないものでした。「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」（一九五九年）は古川図書館と同様にコンクリート打ち放しで木造的な架構の表現を試みた作品といえますが、古川図書館にみられるような繊細なディテールはみられません（次頁）。ところが、古川図書館以後「乗泉寺」（一九六五年）では古川図書館と同様のディテールがみられますし、「東京国立博物館東洋館」（一九六八年）、「東京国立近代美術館」（一九六九年）にいたっては、より一層装飾的なディテールが追求されていきます（次頁）。「（古川図書館の）個々のモチーフの中には、後の帝国劇場・東洋館・近代美術館等に見られる手法の胚胎が感じられよう」（太田茂比佐）と評されるように、古川図書館は谷口のデザイン手法の一つのターニング・ポイントとなった作品とみることができます。

その他、玄関と閲覧室の前室の内装には、外装の施釉タイルのパターンを踏襲しながら、釉薬を施さないタイルが用いられています。内部の間仕切り壁は、クリヤ・ラッカー仕上げの有孔ラワン合板を基調とした、素材感の豊かな仕上げとなっています。内装をふくめて建築当初の色彩も、すべて谷口が決定しました。

◆美術との融合、記念の銘板

谷口は戦後の作品で姉妹芸術との融合を試みたことを後述しますが、古川図書館においても、

左：東京国立博物館東洋館　右：千鳥が淵戦没者墓苑
（『谷口吉郎著作集』第四・五巻）

一つの試みがなされています。二階のエントランスを入った玄関ホールの左のガラス窓に、美術協会「新制作」の洋画家の脇田和による、ガラスとアルミニウムを用いた装飾が施されています。脇田は各種版画、金工、七宝焼など多種多様な技法の修練を経て、油絵以外でもさまざまな創作を試みている作家で、古川図書館での建築装飾もそうした試みの一つです。こうした美術作品によって、エントランスの空間に彩りが添えられているのです。

しかし現在エントランスの一部は、仮の事務室として使用されており、当初のようなパブリックな使われ方をしておらず、作品が人目に触れる状況にないのが

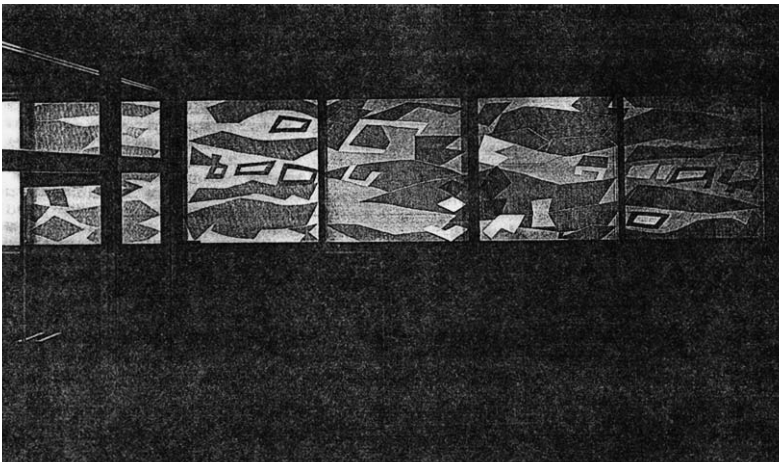
残念です。

またエントランスの突き当たりのタイル壁には、寄付者の古川為三郎、志ま夫妻を顕彰したレリーフ付きの銘板が設置されています。これも建物の由来を伝える非常に重要なものです。

◆古川図書館のデザイン的特質　―閉じない建築―

以上にみたように、古川図書館にはいくつかの優れたデザイン的特質があります。土地の高低差を生かした層構成、東西・南北での柱間の違いによる空間の方向性の演出とシークエンスのデザイン、雁行型の構成による将来増築へのデザイン的配慮、そして「線」による細部意匠、特に打ち放しコンクリートの柱と梁のディテールの処理、こういった点に、谷口吉郎のデザイン的な技量を確かに認めることができます。

これらの点を総合してみると、古川図書館の特質は、「閉じない建築」であるといえると思います。増築を配慮した雁行型の構成は、文字通り将来的な展開を考えた「閉じない」デザインですし、空間の方向性の演出についてみても、その先に二階バルコニーから、あるいは一階喫茶室から、名古屋のスカイラインを遠望することが考えられており、建物内部で完結的に空間が考えられているのではないということがいえます。また、「線」による細部の意匠ということも、その基本原則さえ押さえれば、例えば増築などの際には、新たなデザインの展開も考



脇田和によるステンドグラス（「脇田和自選展」パンフレット）

えられ、決して自己完結的なデザイン手法ではないのです。

このように古川図書館のデザインを読み解いていけば、谷口の思慮の深さに気づきます。そして、谷口吉郎の一連の作品のなかでも古川図書館は、細部の処理によって、打ち放しコンクリートによる架構を装飾的に見せる手法が試みられた先駆的な作品として重要な作品であると位置づけられます。

◆設計者・谷口吉郎について

豊田講堂が三三才の新進建築家槇文彦の手によって誕生したのと対照的に、古川図書館は戦前・戦後を通して息長く活動を続けてきた建築家谷口吉郎の、六〇才を間際にした頃の作品です。

谷口は、さまざまな種類の建築の設計を手がけていますが、一般的によく知られているのは「東宮御所」や「迎賓館和風別館」といった国を代表する公館などにみる「和風」の仕事でしょう。もう一つ重要な功績があります。それは明治建築を移築・保存する博物館「明治村」を構想・創設し、初代館長を務めたことです。

谷口は第一線の建築学者として建築の近代化に貢献し、モダニズムの傑作も残していますが、一方で伝統の問題や文化財の保護など、近代建築の進歩の過程で重要視されてこなかった課題に継続的に取り組み、「モダニズム相対化」の視点を提示した建築家でした。

◆多面的な活動と背景

谷口は初期の作品（「東工大水力実験室」や「自邸」など）を合理主義的なモダニズムのデザインで完成させますが、戦中、戦後を経た一九四七年の「藤村記念堂」をきっかけに作風を変化させます。この間谷口はナチス統治時代のドイツに滞在しますが、第二次大戦の勃発により避難船で帰国しています。彼は当時を振り返りこう記しています。

欧州でいろいろな建築が破壊されたことを思うと、私の旅行中の思い出がありありと、目の奥や心の底によみがえってくる。私の記憶には消滅した建築の形や、その色、その周

谷口吉郎　年譜

年	出　来　事
1904（M．37）	金沢の九谷焼窯元の家に生まれる
1925（T．14）	第四高等学校卒業、東京帝国大学工学部建築学科入学
1928（S．3）	同卒業、卒論は伊東忠太の指導を受ける 同大学院入学、佐野利器の指導を受ける
1930（S．5）	東京工業大学講師となる
1938（S．13）	日本大使館建設工事（造園）の技術交渉のためドイツに出張
1939（S．14）	第二次世界大戦勃発により帰国
1943（S．18）	工学博士号授与（「建築物の風圧に関する研究」）
1952（S．27）	文化財専門審議会専門委員
1962（S．37）	財団法人明治村認可、常務理事となる
1965（S．40）	博物館明治村開館（初代館長） 東京工業大学を定年退官、同名誉教授
1967（S．42）	（株）谷口吉郎建築設計事務所を設立
1979（S．54）	満74歳で永眠

囲までが鮮明になる。そんなことを考えると、私の欧州滞在は実に貴重な時だった。過去の多くの建築や美術が、まさに消えうせんとする、その燃焼の寸前であった。

（『雪あかり日記』あとがき）

建築家としての活動が軌道に乗り始める三〇代後半から四〇代を戦時中に過ごし、ヨーロッパと日本の国土の荒廃をやるかたなくみつめてきたことは、谷口の建築に対する考え方とその後の活動の方向性に大きく影響しているのではないでしょうか。

◆「藤村記念堂」の体験

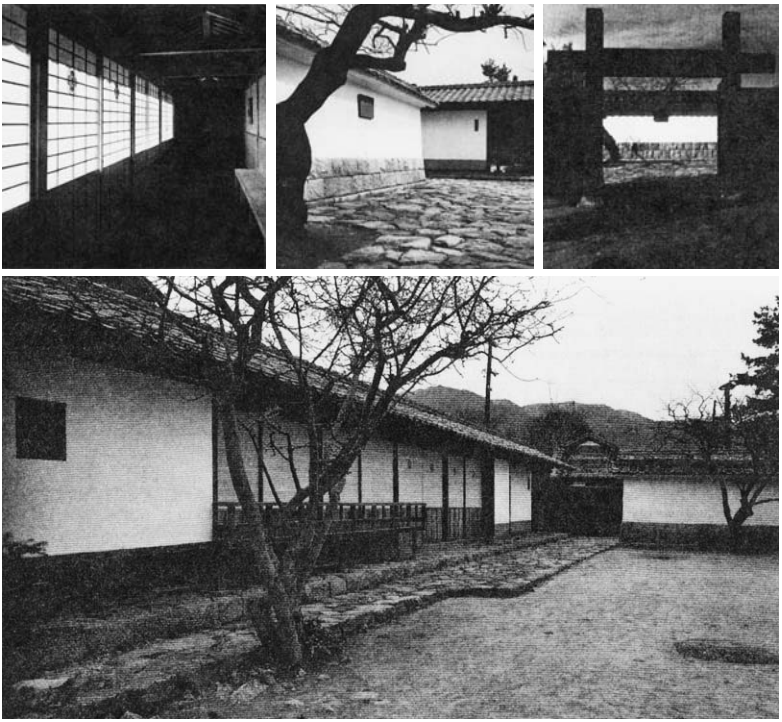
谷口は、戦後直後二年間の体験が「今から考えると、戦後の私の設計態度にある指針をさし示したような気がする」（「建築に生きる」、一九七四年）と述べてい

ます。特に「藤村記念堂」に関わることで、谷口は、建物と人々、そして設計者である自己との関係について再考することになったのだと思います。多少長くなりますが谷口の文章を引きます。

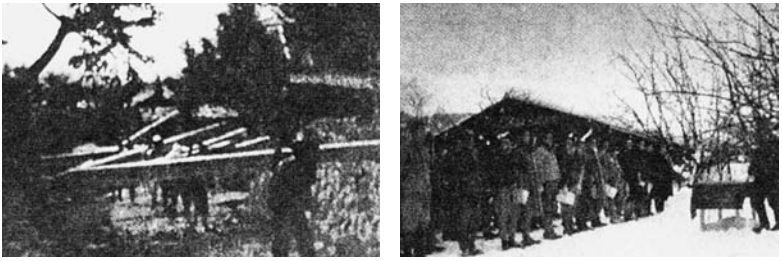
この記念堂の建築工事はすべて馬籠の村人によって作られた。即ち農民の「手仕事」である。全くの素人の手で建てられた建物である。大工、左官、屋根屋、石屋、鍛冶の仕事、すべてが農民の手による。（中略）

その上、建築材料もすべて土地の物である。木材は木曽の御料林から、花崗岩は谷川から、壁土はすぐ畠の土を、瓦が不足のときは、既存の建物の屋根を板葺にふき直してそこから瓦を運んだ。障子の紙までが木曽の手漉きである。表門の金具も手造りである。こんな「風土の技術」と、こんな「風土そのままの材料」によって、この記念堂の建築が築きあげられたのであった。

従って私の設計も、その風土の技術と材料に応ぜねばならなかった。初めて青写真を見る農民のために、私は設計せねばならなかった。それにも拘らず、村人の熱心さに全く私は感嘆した。出来栄えの悪い所は、村人自身が進んで何度も何度も作りかえた。工事中いろいろな苦難も起ったが、それも克服された。田畑のいそがしいときには、昼は野で働き、



藤村記念堂　右上：冠木門、中上：記念堂入口、左上：内部、下：記念堂と前庭
（『谷口吉郎著作集』第四巻）



藤村記念堂の建設（右＝結団式：左＝自力建設の様子、『谷口吉郎の世界』）

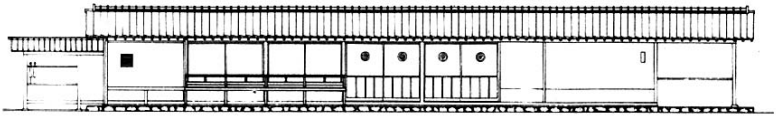
夜は遅くまで工事が進められた。石材は、深い谷川から、村の娘たちや、幼な子までが肩にかついで運んで来た。馬もけわしい坂道をかけ登った。一切が全く心からの寄進である。

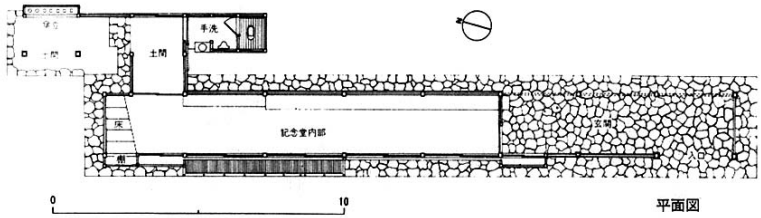
中世の昔、アルプスの山奥に、村人が小さい教会堂を築くときも、こんな工事であったろうと、私は思う。その中世の建築は神に捧げられたものであった。しかしこの馬籠の記念堂は「詩魂」に捧げられた建築である。

（『新建築』、一九四九年三月）

苦しい戦中期を経て迎えた戦後に、谷口は「ウィリアム・モリスが理想としたような世界（藤森照信）」すなわち、民衆の手仕事で美的な世界を再構築するという現場に立ち会うことになったのです。谷口は、これを契機にモダニズムから一歩距離を置いたスタンスを鮮明にします。

彼はかねがね近代合理主義と日本の現実との乖離（かいり）を見過ごすことができずにいました。そうしたおりの「藤村記念堂」の体験により、その問題に取り組む決意を得たのではないでしょうか。





藤村記念堂図面（『谷口吉郎著作集』第四巻）

◆「総合芸術」としての建築力

このように「藤村記念堂」は谷口にとって決定的な体験だったのですが、彼の設計自体も、いまでいう「環境デザイン」あるいは「ランドスケープ・デザイン」といった側面からみて画期的な試みをふくむものでした。藤村の生家「本陣屋敷」を再建せずに焼跡として残すことで土地に象徴性を持たせ、記念堂として建てたのは奥行七尺、長さ一三間半という極端に細長い小屋のみでした。建物以上にまわりの外部空間に表現力を持たせ、藤村をしのぶ一連の光景の展開（シークエンス）を主題とするデザインを試みているのです。

藤村記念堂に引き続いて設計された慶應義塾大学三田キャンパスの一連の校舎群（一九四九年）、秩父セメント第二工場の計画（一九六一年）でも、谷口は引き続きランドスケープ・デザインに意を

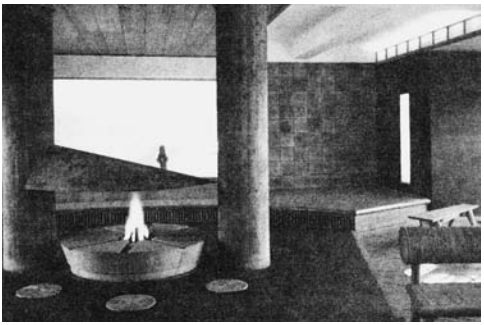
注いでいます。さらに慶応義塾大学三田キャンパスの計画では、他の芸術分野と建築との融合を試みていきます。

「建築」ばかりでなく、「庭園」をも、或いは出来ることなら「絵画」や「彫刻」などの参加も得て、いわば「総合芸術」としての建築力を発揮して、この三田の焼跡に、気持のいい戦後の学園を建設したいと考えた。

（「青春の館」一九五〇年）

谷口は、「新制作」の彫刻家・菊池一雄、画家・猪熊弦一郎に、それぞれ彫刻と壁画による三田の校舎への参画を依頼しました。そして菊池の「青年像」を「パースペクティブの効果」を意識した造園計画との融合させ、猪熊の壁画「デモクラシー」は、「建物が出来あがった後に絵を室内に搬入するのではなく」はじめからの協同制作を実現しました。さらに第二研究館「万来舎」では、米国人彫刻家イサム・ノグチに庭園と「クラブ室」の室内装飾を任せています。

建築と芸術の融合は、必ずしも谷口の独創によるものではなく、ヨーロッパ世紀末のアールヌーヴォーをはじめ、デ・スティル、バウハウスと、モダニズムへの流れのなかでも常にテー



慶應義塾「万来舎」イサム・ノグチによる内装（『谷口吉郎著作集』第四巻）

淡交ビルヂング内「好文庵」露地（『谷口吉郎著作集』第五巻）

マとされてきたものです。ただし谷口の試みには「大衆生活との無縁」となっていく日本美術界に対する問いかけの意味があるようです。

谷口は、一九四九年に「新制作」に建築部が創設されると同時に、当時の主要な建築家とともに参加しています。谷口の試みた建築と姉妹芸術の協力は、時を同じくして新制作に参加した丹下健三によって継承されていきます。谷口とノグチとの協働の翌年、丹下は広島の平和記念公園の計画にノグチの参加をあおいでいます。その後丹下は一九七〇年の大阪万国博覧会で岡本太郎と協働し、著名なモニュメント「太陽の塔」を世に送り出します。

◆谷口と伝統論

藤村記念堂の完成からほどない一九五〇年代になると建築界では伝統論がさかんに論じられるようになります。モダニズムの視点からの伝統建築の見直しの動きは、一九三

〇年代にもみられましたが、五〇年代になると再び建築界の論議を呼び、丹下の「香川県庁舎」など「近代と伝統との融合」を標榜（ひょうぼう）した名作が登場します。こうした動向において、谷口はどう位置づけられるのでしょうか。

谷口は、近代的な建築の種類、たとえば図書館や美術館、オフィス・ビルなどで、伝統的表現を取り入れてデザインしています。名古屋大学の古川図書館もその例であるともいえるでしょう。その一方で谷口は、宗教施設や旅館、料亭など、おのずから「和風」を求めるような建築にも取り組み、そこでは真正面から「和風」のデザインを展開しています（前頁左）。それらは谷口にとって「「和風建築」である前に「現代建築」であったはずである。つまり、現代にもその有効性を主張しうる建築として構想されていた（藤岡洋保）」と思われます。こうした姿勢は一九五〇年代に伝統論を展開していた丹下など次世代の建築家とは明らかに異るものです。谷口自身は「和風」について、次のように述べています。

私たちの富の程度、それを私たちは清貧といっているが、それを誇りとして自分たちの社会を支え、日常の生活を美しく表現しようとする強い意匠。それが即ち私たち建築家の「和風」だといえるのではなかろうか。

（「和風と洋風」、一九五八年）

「伝統」の問題も、谷口のなかでは、庭園や彫刻・絵画との共同による「総合芸術」への試みと同一の文脈上にあったといえます。すなわち彼は、人々が「日常の生活を美しく表現」するうえでの有効性を「和風」に見出していたのです。谷口は、伝統の問題をより実践的にとらえていたといえるでしょう。

おわりに

◆建築と景観の価値

一九九三（平成五）年、豊田講堂は大改修を受け、裏庭にはシンポジオンが建てられ、同年一〇月には名古屋市の「都市景観重要建築物」に指定されました。また、豊田講堂や古川図書館が面するグリーンベルトも、同年七月に名古屋市の条例による「四谷・山手通都市景観整備地区」に指定されました。すなわち、豊田講堂やグリーンベルトの景観は、名古屋大学だけのものではなく、広く公共の資産として位置づけられているといえます。さらに近年中には、グリーンベルトの中央に名古屋市営地下鉄「名古屋大学駅（仮称）」が開業すると聞いています。

今後より一層、豊田講堂、古川図書館そしてグリーンベルトの景観に注目が集まることになろうと思われます。またこうした一連の指定により、豊田講堂については現状変更行為の届出義務があり、グリーンベルトまわりでは広告物の規制などが課せられています。ただし、このような規制に頼らなくとも、大学はグリーンベルト周辺の景観整備を積極的に進めていくべきですし、また大学構成員一人ひとりも、景観の価値を認識し、美しいキャンパスの保持に小さな努力を積み重ねていただきたいと思います。

豊田講堂は、時計台の電飾や夜間ライトアップも行われ、ランドマークとして定着しています。講堂とそのテラスは入学式、卒業式などの各種式典の会場として恵まれたスペースです。古川図書館は、約二〇年間、古川総合資料館などの活動によって継承され、現在、名古屋大学博物館として来館者を集めています。この建物の吹き抜け空間は展示空間としても充分に魅力的であり、資料館時代もふくめ極めて適切な用途に活用されています。ただし、やむを得ない理由によるエントランス付近の仮使用や各種間仕切りにより、必ずしも建築の特質を充分に生かした改修が行われているわけではありません。建築の価値を生かしながら手を入れていくには、これまで述べてきたような建築のデザインを読み解く作業をふくめて、専門的な視点からの周到なデザイン的検討を要します。今後、こうした点に充分な時間と労力を割いて、古川図書館が、もともと備えていた価値を取り戻しながら、一層有効に活用していく努力が不可欠だ

と思われます。

◆メンテナンスと建築文化

昨今の国立大学の建物をはじめとする公共建築は、なるべくメンテナンスの必要のない建物をつくる傾向にあります。とくに豊田講堂や古川図書館にみられる打ち放しコンクリート仕上げは、タイル貼り仕上げに比較してメンテナンスが必要なので、うとまれることが多いようです。しかしながら、たとえタイルが張ってあろうとなかろうと、いかなる建物も点検や保全を行わなければ、当初予定された耐用年数を迎えることさえままなりません。

一度建ててしまえば、あとは何の手入れもせず、汚れたり壊れたりしても、基本的性能に支障がない限り放っておき、挙げ句は朽ちるまで使いつぶす。こうした「スクラップ・アンド・ビルド」という考え方は、消費社会における文化的貧困の表れであり、大変残念に思います。多少の手入れさえすれば、建物はずっと長持ちしますし、使う人にとって身近な存在になっていくのです。大学に関していえば、このような潤いのない空間で、我が国の文化を担う人材を育成するのは、いかにも心もとない話です。大学の構成員である各自が、大学の建物について正しい知識と関心を持ち、「建物を大切にする大学」をめざすべきでしょう。そうした土壌の上にこそよい人材が育つのではないでしょうか。

◆コンクリート建造物の保存と再生

先述してきた通り、豊田講堂と古川図書館という二つの寄付建物は、第二次世界大戦後の日本を代表する鉄筋コンクリートによるモダニズム建築です。そしてそれらは、東山キャンパスの生い立ちを正しく伝えるものであり、そのデザインをよく学んだ上で今後のキャンパス計画において尊重し継承することが大変重要であると思われます。

ところでコンクリートは年月とともに「中性化」が進行しますが、高温多湿の日本では実際には五〇年前後で取り壊されることが多いのです。特に戦後の高度経済成長期に用いられたコンクリートの性能は著しく劣ることが指摘されています。このような状況において我が国におけるコンクリート建築は、果たして歴史的建造物となり得るのでしょうか。サステナビリティ（持続的発展）という観点からすれば、第二次大戦後におけるコンクリート建築による歴史的建造物の保存と再生は、現代社会における重要な課題になりつつあります。豊田講堂に代表されるこの時期のコンクリート建築を「高度経済成長期の負の遺産」としてしまってはいけません。豊田講堂については、平成一一年度に行われた耐震診断によって、基本的な耐震性能には問題がないことが確認されていますし、古川図書館については、近年中の耐震改修が計画されています。

一方、国公立大学は現在、大きな転換点を迎えており、政府は国公立大学施設の大規模改修

を行う方針を打ち出しています。これらの一連の改修事業において、コンクリート建築の保存と再生に対する方針を打ち出す必要があります。その際、コンクリートの耐用年数という単なる性能上の講論に終始してはなりません。中性化の問題に対処する上でそのメンテナンスを定期的に行っていくのはもちろんのことですが、我が国では、そうした性能を議論する以前の空間の美的価値に対する議論があまりにも浅薄です。レンガの建物をみる際に生じるある種の郷愁や憧憬と同じ価値観によって、戦後のコンクリート建築を評価できるとは思えません。今後我々は第二次大戦後におけるコンクリート建築に対する審美的な価値観の創造と、空間の質に対する積極的な評価を行う必要があります。それは名古屋大学の二つの寄付建物が示唆する問題に他ならないのです。

〈引用文献・参考文献〉

藤森照信『日本の近代建築（上・下）』（岩波書店、一九九三年）
内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会『内田祥三先生作品集』（鹿島出版会、一九六九年）
一橋大学新聞部『一橋新聞　復刻版』（不二出版、一九八八年）
竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』（「中央公論新社、一九九九年」）
名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史　通史一・二』（名古屋大学、一九九五年）

名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史　部局史二』（名古屋大学、一九八九年）
稿本名古屋大学五十年史編集委員会編『稿本名古屋大学五十年史 八』（名古屋大学、一九九四年）
須川義弘『半生を顧みる』（私家版、一九八二年）
木方十根「愛知医科大学時代の施設拡充について」（『名古屋大学史紀要』第七号、一九九九年）
小橋博史『獅子奮迅　古川為三郎伝』（古川為三郎伝発行委員会、一九八九年）
内井昭蔵監修『モダニズム建築の軌跡』（INAX出版、二〇〇〇年）
鈴木博之、石井和紘『現代建築家』（昌文社、一九八二年）
栗田勇編『現代日本建築家全集19』（三一書房、一九七一年）
槇文彦『記憶の形象』（筑摩書房、一九九二年）
槇文彦編著『見えがくれする都市』（鹿島出版会、一九八〇年）
槇総合計画事務所編著『槇文彦のディテール　空間の表徴―階段』（彰国社、一九九九年）
八束はじめ、吉松秀樹『メタボリズム』（INAX出版、二〇〇〇年）
横山正『時計塔』（鹿島出版会、一九八六年）
Reyner Banham, *The New Brutalism*, London, 1966.
Reyner Banham, *Megastructure*, New York, 1976.
日本建築学会谷口吉郎展実行委員会編『建築文化別冊　谷口吉郎の世界　モダニズム相対化がひらいた地平』（彰国社、一九九七年）

谷口吉郎作品集刊行委員会『谷口吉郎作品集』（淡交社、一九八一年）
谷口吉郎『谷口吉郎著作集　第一巻〜第五巻』（淡交社、一九八一年）
浜口隆一『現代デザインをになう人々』（工作社、一九六二年）
神代雄一郎『現代建築と芸術』（彰国社、一九五八年）
藤岡洋保「伝統論争の歴史」『建築二十世紀　part 2』（新建築社、一九九一年）
川添登『建築家・人と作品　上』（井上書院、一九六八年）
Barry Bergdoll, *Karl Friedrich Schinkel -An Architecture for Prussia*, New York, 1994.
「脇田和　自選展」（名古屋画廊、一九八八年）
藤井正一郎『現代建築をどうとらえるか』（彰国社、一九六八年）
布野修司『戦後建築の終焉』（れんが書房新社、一九九五年）
山本一輔『コンクリートが危ない』（岩波新書、一九九九年）

著者略歴

堀田　典裕（ほった　よしひろ）
一九六七年、三重県生まれ
名古屋大学大学院工学研究科修了
現在、名古屋大学工学部社会環境工学科
建築学コース　助手
専攻　建築意匠論・建築設計

木方　十根（きかた　じゅんね）
一九六八年、岐阜県生まれ
東京芸術大学大学院美術研究科修了
現在、名古屋大学工学部社会環境工学科
建築学コース　助手
専攻　建築史・建築設計

名大史ブックレット4
豊田講堂と古川図書館
――名古屋大学の寄付建物――
二〇〇一年一二月二八日　第一刷発行

著者　堀田　典裕
　　木方　十根

編集発行　名古屋大学大学史資料室
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
電話　〇五二（七八九）二〇四六

印刷所　株式会社　クイックス
〒456-0004　名古屋市熱田区桜田町一九―二〇
電話　〇五二（八七一）九一九〇

表紙表：豊田講堂ピロティより古川図書館を望む
表紙裏：古川図書館屋上より豊田講堂を望む